

2011年11月6日 年間第32主日 死者のためのミサ
マタイ 25 : 1~13

高円寺教会 9 : 30 ミサ

導入

おはようございます。8ヶ月ぶりに高円寺教会でミサをささげることができて感謝の気持ちでいっぱいです。山口に赴任してからもお世話になった高円寺教会で皆さんのことを思うと元気が出ました。支え合いの见えない絆で結ばれていたことに感謝します。

今日は、死者のためのミサです。札に掲げられた方をはじめ、私たちの家族・友人に、永遠の魂の安息があるように、また今を生きる支え、励ましを天国からいただけることを願ってミサを始めましょう。

説教

私が上京した理由、上京の目的は2つありました。1つは、3日の澤田神父さんの叙階60周年のお祝いでした。ミサとパーティに与って、司祭として生きる重み、素晴らしさを体験させてもらいました。

2つ目の目的は、山口教会と山口天使幼稚園のバザーの収益金をお送りした、福島県二本松市の幼稚園を訪れるためでした。

私は、6月末と8月末に宮城県の塩釜市に被災地のボランティアに行きました。一番心に残ったのは、原発のある女川町の病院の駐車場から眺めた、ほとんどすべてが流された光景でした。今も目に焼きついてますし、私の人生に大きな衝撃を与えました。イエズス会に入る前、私は、住宅の販売をしていて「自分の会社の家は、どこよりも強い」と宣伝していました。でも、そんな努力も津波の前にはひとたまりもないことを感じました。

被災のあまりの規模に途方がくれながら、ヘドロかきや、砂浜の片づけを毎日していました。「私のしていることはほんのわずか。でもした分だけきれいになる」と思いながら汗をかきました。被災地の復興を祈りながら一日に2~3リットルの汗を流しました。

山口に戻って、「被災地のために何かできないか？」と思っていたときに、教会と幼稚園のバザーが目前に迫っていました。私は、教会の仕事のほかに幼稚園の講師もしていて、園児にみんなと楽しく過ごしているのですが、カブトムシを捕まえて販売して、義捐金を作ろうと考え付きました。幼稚園の先生方への朝礼が終わると、私は、かごとスコップ、蚊取り線香を持って、山に入って斜面の腐葉土をひたすら掘りました。さなぎから孵ったばかりのカブトムシを探しました。山口は自然に恵まれているので、カブトムシも東京に比べてたくさん居ます。それでも、簡単には見つかりません。汗だくになって掘り続けました。時々、散策に来た人に出会いました。「大の大

人がこんな時間に何してんの？ 子供たちがカブトムシを楽しみにしてるのに乱獲するんじゃない！」と思われてるような気もしました。でも、被災地のために汗をかいてるんだと言い聞かせて続けました。がんばって4日間で、雄雌あわせて100匹以上の成虫のカブトムシを見つけることができました。雄雌つがいにして500円で販売して2万円の収益が出ました。幼稚園の保護者、教会の人たちもたくさんの汗を流して、売り上げが伸びました。その売り上げを全部合わせて、10月にN幼稚園に送りました。

おととい行って来た二本松は、津波で被害を受けた塩釜とは質が違う苦しみを背負っていました。体験したことをお話しすると長くなるので、パソコンに打ったので関心のある方はお読みください。「こどもたちが外で遊べない。」「夏もエアコンがつくまで窓を閉め切った蒸し風呂状態で授業していた」「部活も外でできない」「県外に移っても放射能が着いた瓦礫扱いされることがある」「農作物がまったく売れない。」「原発さえなければ…」目の前の生活の苦しさ、子供たちにどんな健康被害が現れるのか？という不安を抱えながら生活しています。現地の人たちに何の罪もありません。心が折れそうになりながらも、必死で前を向こうとされています。そんな状態だからこそ今回の支援は、神様からのプレゼントに感じたそうです。苦しいけどまた園児のためにがんばろう、という気になれました、と語ってくれました。

私たちのしている被災地への支援は、お金やモノを越えていきます。具体的に助けると同時に、生きる希望を与えます。そのことを、今回の訪問でも感じました。

さて、少しだけ福音に触れたいと思います。今日の福音にある「油」、5人の賢い花嫁が持っていた「油」、愚かな花嫁が持っていなかった「油」とは何でしょうか？私は、被災地の人を思って、苦しむ人のことを思って流す“汗”と“涙”と“祈り”だと思います。カブトムシを探したときの”汗”、苦しむ人を思って流す”涙”、そして私たちの捧げる“祈り”が、遠くに居る人々に「油」「希望」を与えます。その喜ぶ姿で私たちは新しい「油」を作るエネルギーをもらいます。

このミサは、死者のためのミサです。亡くなられた家族・友人も私たちのためにたくさんの「油」を注いでくれました。いただいた「油」を思い起こせば今も、いつまでも故人とつながっていることがわかるでしょう。私たちは、信仰があるから、天にいても地上にいても永遠の命でつながっています。ありがたいと思います。

説教の最後に1曲聴いてみたいと思います。私が歌えるといいですが、自信がないのでCDを流します。私たちが頂いた「油」を思い出して、また新しい「油」を差し出せることを願いながら聴いてみましょう。小田和正さんの「今日もどこかで」です。

気つかないうちに 助けられてきた 何度も 何度も そして これからも
数えきれない やさしさに 出会ってきた
なつかしい 笑顔が 浮かんでは 消えてゆく

誰かが いつも 君を見ている 今日も どこかで 君のこと 想ってる
巡り会って そして 愛し合って 許し合って 僕らは つながってゆくんだ

透きとおる 光が 分け隔てなく すべての人たちに 朝を運んでくる
その一步を もう ためらわないで
誰かが きっと 受け止めてくれる
一度きりの 短いこの人生 どれだけの人たちと 出会えるんだろう
ほんとうに 大切な人たちと かけがえのない その人と この広い 空の下で
降り続く雨は やがて 上がる かくれてた 青い空は どこまでも広がってく

誰かが いつも 君を 見ている 今日も どこかで 君のこと 想ってる
巡り会って そして 愛し合って 許し合って 僕らは つながってゆくんだ

カトリック山口教会
助任司祭 柴田 潔

福島県内のある幼稚園と市内を訪問して

支援のありがたさ

お金をポンと出せる人はいる。でも、汗をかける人は少ない。

同じ支援が果たして自分たちにできるのか？

浪江町から避難して来た人が大勢いましたが、「何か困ってませんか？」と声をかけることがなかなかできなかった。心にはあっても、なかなか言い出しにくい。8割の人が言えない。それをしてくれたので「えらいなあ」と感心する。

被災直後に困ったこと

食料がない。パンも弁当も牛乳もない。

ガソリンがない。1 晩並んで待って 20 リットルやっと入れられた。中には、車内で暖を取るために練炭を炊いて、一酸化中毒で死んだ人もいる。

輸送物資のトラックも福島県内には入りたがらない。栃木県まで。

だから、コンビニにも那須町ならお弁当・カップラーメンが手に入るが福島県にはない。極端な格差が生じた。

被災直後の幼稚園でも避難者支援での出来事

「何が食べたい？」と子供たちに聞いてみた。「二週間肉を食べてないので肉を食べたい」とリクエストされた。食料が手に入らない中、どうしたものか？と思索した。すると保護者が肉を提供してくれると言う。かき集めた野菜とともに鉄板で焼いて食べさせた。子供たちは「大きくなってもこのお肉のことは忘れない。きっとどこかでお返ししたい」と言ってくれた。この2週間の苦労が報われて涙が出てきた。幼稚園の先生・OBだけでなく、小学校の先生も校長に直訴して手伝いに来てくれた。ゆずの曲をギターで弾いてくれた。これも忘れられない記憶。ブロックが壊れ、水道管が破裂した中で、被災者を受け入れた。どうなることかと思ったが2週間よくやれたと思う。

保護者会長のYさん

バスの運転手さん。原発事故後は、浪江町から住民を運ばれた経験を持つ。やばい。大変なときに会長になってしまった。知り合いの伝を頼ってバスを手配して、春の遠足など年中行事を何とか実現させてきた。バザーでの鉄板焼きも、園児を外に出せないのも自分たち大人が焼いて室内の子供たちに食べさせた。バザーの感想の中から「今年は条件が悪い中、よくここまでのことを実現させてくださいました。感謝申し上げます。これからも充実した教育を粘り強くお願いします。」見ている人は見ていると感じてうれしかった。

N 幼稚園の負担

カトリックの精神。生活保護を受けている片も受け入れている。表立ってには言えないが、保育料を安くしている。その評判を聞いてか、何名か受け入れているので経営は苦しくなる。でも、いつかどこかで実りがあると信じたい。

学校法人ではなく宗教法人格。宗教法人にすれば「カトリック」の名前を出せるが経営は苦しい。(100万円もらえるところが30万円とか・・・)助成金はかなり抑えられてしまう。園長先生が会計の仕事もしている。厳しい台所事情のところ地震・原発事故に見舞われた。

小学校の様子

市内の小学校は、校庭で遊ばせられなかった。やっと、9月になって校庭のあらかたの除染が済んで外に出られるようになった。けれども、保護者の中には心配する声もあり、校庭に出るかでないかは本人・家庭の意志に任せている。新興住宅地にある小学校は、保護者の意見がまとまらず学校は苦勞している。通りかかった小学校では、道路と校庭との間にある植え込み・樹木は除染作業が済んでいないため立ち入り禁止のテープが張られていた。教員・校長先生が休み時間には

校庭に立って、そこに入らないか見回っていた。

サッカー部の練習は廊下でした。幼稚園は、外遊びできないのでバスを借りて体育館に連れて行った。

夏場でも教室のガラス戸を閉めて授業していた。クーラーが入るまで蒸し風呂のような状態だった。

ほこりだらけでマスクをしながら授業を受けていた。

外遊びできない

よく家族がお子さんを連れて行った公園

今は誰も来ない。砂場は、雑草が生い茂っている。

鉄棒もさび付いてる。

外は危険。子供たちの将来に健康被害を出したくない。

錯綜する情報。疑心暗鬼。何を信じていいのか？

浪江町仮役場

福島県男女共生センターが浪江町仮役場になっている

役場のブースの入り口には東京電力の職員が2人座っていて相談事を受けている。

ホールの中に鉄骨を立てて部署わけをする蛍光灯が設置されていた

普通の役所とは様相が違っていた

仮設住宅申し込みブースなどがある。

実働している人のほとんどが緊急雇用者。元からの職員は、原発事故があってすぐ秋田、新潟に県外に避難した。悪く言えば逃げてしまっただけで職探しを始めた。近隣の県が、受け入れを早くから表明してくれたのはいいが、そういう情報をつかめる人は少ないし今回のように役所の人が出て行ってしまうのは考え物。

福島県の産業

観光は大きな収入源。

それなのに、激減した。老舗の旅館も「気力もないし、力もない」とがっくりして閉めてしまった。岳（だけ）温泉も閑散としている。

被災直後は、避難者が旅館で暮らした。でも、今は誰も来ない。

打撃を受けても救済はすぐにされない。自分の貯蓄を切り崩すなりして生きていくしかない。

食品の安全性

チェルノブイリのときは、何も情報も基準もなかった。事故のことを知らされない人が作ったものをそのまま食べて病気になったり死んでいった。

けれども、今は基準がある。厳しい基準値にして、リスクが避けられていることを示すために、一つ一つ測ったものしか出荷してない。それなのに売れない。「どうい

ことか！」という怒りがある。

国も東電もどうしていいかわからなくて何もしない、できない。

結局、自分たちでやるしかない。けれども、やればやるほど気が遠くなる作業。

むなしさがこみ上げる。

保障についての不安・怒り

福島は、米や野菜、果物で生計を立てている人が多い。取り立てて福島にしかないものはない。だから、農産物が売れなくなると打撃が大きい。

すでに作付けをあきらめた農家も多数ある。田畑は荒れてもう耕作はできない。生活手段はなくなった。それに対する具体的保証はまだない。この冬を越せるのか？と不安な人が多い。けれどもあまり注目されてない。

たとえば、今年保障されたとしても来年以降どうなるのか？ まったく先が見えない。

ヨウ素

ドイツでは、原発が作られた時点で周辺の人々に配られていた。30～40歳。子供ができる年齢の人を対象に配っていた。

今回も遅まきながら配られた。ただし、指示があるときまで飲まないように。

子供の偉さ

大人は我慢できない。肉が食べたい、魚が食べたいと言ってしまう。でも子供は我慢する。「お肉食べたいか？」と聞いても「津波の人たちは食べられないから、いい」と言う。そういう子供たちと一緒に居られることはすばらしいと思う。

差別

知り合いの会社の同僚が転居した。

小学校では、席順を決める前にある保護者が「自分の子供の近くに座らせないで」と先生に根回ししてきた。こんな、瓦礫の一部みたいに扱われるならいい」と戻ってきた。被災者に、二重三重の苦しみを味合わせないでほしい。政府もしっかりとした放射能に関する情報を流してほしい。

仮設住宅

浪江町から230世帯が移り住んできている。みなすでに7～8回転居させられてここにたどり着いた。すでに相当疲れている。これから5年間住むことになる。

家賃は払わなくていいが、光熱費などは自己負担。ここは坂を下りればスーパーがあって便利な方。少しずつ知り合いもできた。集会所もあるのでコミュニティが作れる期待もある。病院、デイサービス、床屋もある。スーパーから移動販売車も来る。コミュニティバスも坂の下に来る。

仮設住宅はスポーツセンターの野球グラウンドに設けられている。県内の多くのグラン

ドは仮設住宅でふさがった。屋外スポーツ、部活の対外試合どころではなくなった。家は、地主だったり裕福な家族が多い。けれども、放射能で土地建物の価値はゼロになってしまった。人生、何が起こるかわからない。この世の富は当てにならない。これから寒い冬を迎えてどう過ごすのか？ 仮設住宅は、断熱性も弱く寒くなる。まだ、暖房器具は支給されてない。支援物資は春物・夏物ばかり。一時帰宅が認められたとき、衣類や寝具を持ってくる。除染して線量計で計って安全が確認されたものを使う。かつての住まいは、手が入られていないため荒れ果てている。家畜は野生動物に化している。田畑ももう使えない。生活手段が完全に奪われた。農家の人はほかの仕事はできない。どのように政府や東電は保障するのか？

今被災者が望んでいること

「大丈夫」と宣言してほしい。今メディアで取り上げられるのか「危険！」と主張する人ばかり。そうでないと視聴率が稼げないからか？ 逆にメディアから注目浴びたい人は「危ない」と言う。政府・東電は、安心できるまで除去してほしい。地震・津波直後に、原発事故さえなかったら助けられた人が居たはず。どうして助けに来てくれないの？と思いつつ死んでいった。こういうことは2度と起こして欲しくない。